

会長の挨拶 7 調和と止揚

ロータリー思想が調和と止揚に終始するの余り、一切の概念を包摂し尽くそうとするものであると思っはならない。ロータリーの調和と止揚に親しまない諸価値を現わす概念もあり、これに対してはロータリーは断乎として否認の挙に出るものであることを明らかにしなければならない。それではこの否認の論理は、ロータリーにあってはどのような場に作用するものなのであろうか。

一言にしてはロータリーは非ロータリー的なものに対しては断乎否認—全部又は一部—の挙に出るものである。つまり、ポール・ハリスの述べているようにロータリーは決して善と悪との間に橋渡しをするものではない（ポール・ハリス『ロータリーの理想と友愛』米山梅吉訳 p 159～164）。ただしロータリーは悪を憎むことはあっても、人間を憎まないという事実を特に注意しなければならないのである。ロータリーにあっては、人間そのものの価値を無限に深くいとおしむ。否認の論理の作用は実はこのためなのであって、相手方の自覚の喚起が目的ではあっても、相手方そのものの価値の否定が目的なのではないのである。

ロータリー思想の形式的な、つまり外見上の特質を理解したからといって、その実体が分かる訳ではない。従って、従来ロータリーを定義づけるのにこの外形上の特質のみを以てしたことは、逆にロータリーの組織活動において諸々の過程を経る各ロータリアンの洗心の過程を表現することによって、この過程の内容・実体・本質に対する把握を怠らせる結果なっていることは反省しなければならない。つまり、この立場に終始する限りにおいて『分かったようで分からない』のがロータリーということになるであろう。

（小堀憲助著 『ロータリー思想の理論構造』より引用）